

ターミナル期にある患者のその人らしさを支える 看護を実践するための教育的試み

—看護過程を用いた問題解決思考から，リフレクションへ—

池口 佳子¹⁾ 高田 幸江¹⁾

The Educational Endeavor to Implement Nursing Care That Supports the Individuality of Terminally Ill Patients

—Shifting to Reflection from the Problem-Solving Approach Using the Nursing Process—

Yoshiko IKEGUCHI, MA, BSN, RN¹⁾ Yukie TAKADA, PhD, RN¹⁾

〔Abstract〕

At this university, we offer terminal care practice as an elective in the fourth year. Students are placed in charge of patients who are in the terminal stage of life for various reasons and suffer from a total pain experience : physical, psychological, social and spiritual. In the 2015 academic year, in addition to the use of the SOE Sheet, which was designed to understand the subjects, we developed the Reflection Sheet as a teaching method as opposed to the conventional nursing process of problem-solving ; its objective was to further deepen nursing care that supports the individuality of each terminally ill patient. It also deepens the view of life and death, and the concept of nursing that individual students may hold. With the Reflection Sheet, it became possible for teachers and instructors to visualize the nursing behavior and thinking process of students, and thus, they were able to teach nursing care based on each student's thoughts toward nursing. The students, too, were able to examine their own thinking process and feelings from an objective point of view. Some of the ward staff shared the opinion that it was difficult to give instructions since they were not familiar with the Reflection Sheet ; therefore, future issues include the objectives of its use and the sharing of its teaching methods.

〔Key words〕 terminal care practice, reflection

〔要旨〕

本学では、4年次に選択科目としてターミナルケア実習を開講している。学生は、様々な理由により人生の終末期にあり、身体・心理・社会・霊的な苦痛をトータルペインとして体験している患者を受け持つ。2015年度は、ターミナル期にある患者のその人らしさを支える看護と学生の死生観、看護観を深めるための指導方法として、従来の問題解決思考型の看護過程の展開ではなく、対象理解のためのSOEシートの活用に加え、リフレクションシートを開発した。リフレクションシートにより、学生の看護行為と思考過程が可視化され、教員や指導者により、学生の看護への思いを踏まえた看護支援指導ができた。学生にとっても、自身の思考過程や思いを客観視できるという効果があった。病棟スタッフには、リフレクションシート自体のなじみが薄く指導が難しかったという意見があり、リフレクションシート活用の目的や指導方法の共有を課題とする。

1) 聖路加国際大学看護学部 成人・高齢者と家族の看護領域 St. Luke's International University, Adult, Gerontological, and Family Nursing

〔キーワード〕 ターミナルケア実習, リフレクション

I. はじめに

看護過程は、初学者である看護学生にとって、健康上の課題を抽出し問題解決を図るための看護の思考プロセスを学ぶために必要とされ、看護基礎教育において広く教授されてきた。しかしその一方で、臨床の場において、看護師が必ずしも看護過程を用いていないという現実や看護過程に重きがおかれる現状においては、臨地実習で「学んでほしいこと」と実際に学生に「学ばれていること」との間には乖離がある¹⁾という指摘もある。聖路加国際大学の実習は、4年間を通してレベルⅠ～Ⅲの3段階に分け、到達目標が設定されている。今回、実習レベル目標のⅢとして位置づけられている学部4年次の総合実習ターミナルケア実習において、リフレクションを実習記録に取り入れた教育的試みを行った。リフレクションシート開発に至った経緯と実践について以下に報告をする。

なお、リフレクションについて、青木(2003)は、鏡や水に映った影や光の反射のことも意味しており、自分自身の姿を鏡に映してみるかのような自己認識や自己対話、自分自身を振り返り、熟慮、熟考するという意味も含まれているとし『深く省みる』という意味で「内省」と訳す²⁾と述べている。本報告において用いる「リフレクション」はこれを採用して用いている。

II. リフレクティブサイクルを用いた教育的試み

1. 昨年度の実習からの課題

エンド・オブ・ライフケアは『診断名、健康状態、年齢に関わらず、差し迫った死、あるいはいつかは来る死について考える人が、生が終わる時まで最善の生を生きることができるように支援すること』²⁾と定義され、その中におけるターミナル期の看護においては、健康上の課題について焦点を当てて看護を実践する問題解決思考だけではなく、患者の人生の脈絡における集大成としての別れの時をどのようにサポートするのか、最期の瞬間までその人らしく生きることを支えるための看護が求められる。

従来の問題解決思考の看護過程は、ひとりの生活をずる人である看護の対象を看護上の問題から関わるプロセスである。しかし、ターミナル期においては、その特性として問題は解決することは少なく、むしろ増えていくということが常態とされる時期でもある。このような時期を支えるターミナルケアにおいては、問題解決型に向

けた看護過程の展開自体が実態にそぐわない傾向があると考えられた。ターミナル期においては、トータルペインとして全人的に患者の苦痛を捉え、今までの人生も含めた生活者として患者の全体像を捉える視点がより求められてくる。

学部4年次の総合実習ターミナルケア実習では急性期病院の緩和ケア病棟において、がんのターミナル期の患者と家族を対象に、身体的な苦痛のみならず、トータルペインを理解し、最期までその人らしく生きることを支える看護について学ぶことを実習目標としている。昨年度の実習指導において従来の看護過程を用いた記録用紙では、患者を全人的に捉えた内容や患者との関わりの様子が記録上から伝わりづらく、学生が患者をどう捉えて、患者に対してどんな関わりをしたいのかを指導者にうまく伝えられないという事態が生じていた。また、ターミナル期にある患者の、身体・心理・社会・霊的な苦痛をトータルペイントして全人的に捉えたはずであるのに、看護過程を活用した問題解決思考を踏ませ計画を立案すると、患者の持つ苦痛は分断されてしまう傾向にあった。学生たちにどんな患者さんで、患者さんのその人らしさをどう捉えたのかと問うと、学生は生き生きと自分の担当患者のそれまでの人生や家族への思いを踏まえ、患者や家族の希望する最期の時間の過ごし方について、学生なりに捉えた内容を豊かに語る事ができた。しかし、ターミナル期にある患者の持つ複雑なトータルペインとそれを有する患者や家族に対してどのような看護をしたいのか、また患者や家族とどのような関わりをしたのかを書き表す用紙はなく、指導者の部署スタッフや学部実習担当者に十分に思いを伝えられず、これらを共有するために、指導者へ学生の思考過程を説明するための時間を設けて対応してきたという現状があった。

そこで、2015年度総合実習のターミナルケア実習においては、3年次までに問題解決思考に基づいた看護展開は既習できているという前提条件のもとに、リフレクティブサイクルを取り入れたリフレクションを用いた実習記録を作成し、事前に病棟の学部実習担当者や管理者と相談した上で、実習記録として導入することとした。

2. 看護基礎教育にリフレクションを用いることで期待される学習効果

田村ら(2014)は、Schonのリフレクションの概念定義をもとに看護専門職にとって、患者を含むその状況の何を観察して、どう感じ・考え・判断して、どんな看護行為をするかという『思考と行動をつなぐプロセス』が

きわめて重要になるといい、行為についてのリフレクション（reflection-on-action）により、実際に行った行為を後で意図的に振り返ることで、自分が用いた知識やスキル、考え方を整理し、意味づけることができ、新たな知見や理論の獲得にもつながる^{4a)}と述べている。このことは、行為の中のリフレクション（reflection-in-action）を事後に振り返り、行為についてのリフレクションを行うことで、看護学生が看護師のように考えることを学ぶことに繋がるという。この思考過程は、座学と実践を統合する際にも有効とされる。そうであるならば、統合の経験学習の場である実習において、学生が自らの経験を意味づけ、理論や根拠を明確にすることにより、看護専門職としての批判的な生涯学習姿勢を身につけていくことができると考える。今回の教育的試みにおいては、Gibbsのリフレクティブサイクルを基にした田村らのリフレクションを参考に、新たな実習記録用紙を開発し、指導に活用した。

3. リフレクティブ・ジャーナルを用いた実習記録の作成

リフレクションを行う際に、語りと共に記述を活用することでリフレクションの学習は効果的に進んでいくといわれ、この記述をリフレクティブ・ジャーナルという^{4b)}。今回のターミナルケア実習においては、リフレクティブ・ジャーナルとして記述を行うリフレクションシートを組み入れることとした。

1) ターミナル期にある複雑な患者の全体像を把握するための SOE

ターミナル期の患者の複雑な病態生理と看護上の問題を抽出し、患者が感じている様々な苦痛の関連性を視覚的に理解し、それらの苦痛をトータルペインとして捉える目的で、SOE (sequence of events 関連図) を用いることとした。また、症状緩和を行うために、人体像を SOE に組み入れることで患者の苦痛の状態を把握できるように工夫し、看護問題は SOE 上に優先順位をつけて全体像の中に書き入れるようにした (図1)。また、SOE は実習期間を通して、追記していき看護介入も含めて記入するよう指導した。

2) リフレクションを用いた日々の記録用紙『様式1』

日々の記録用紙の様式1 (図2) においては、従来の看護問題解決のための看護目標ではなく、SOE で捉えた全体像を基に、今日一日をどのように患者に過ごしてほしいのかを表現し、それを達成するための具体策を立案できるように工夫した。また、学生の行動計画のタイムスケジュールを記載する項目を設けた。具体策は、SOE でとらえた患者の苦痛の発生機序を正しく理解した上で、その要因を踏まえた適切な症状緩和ケアについての知識をもとに、患者の嗜好や希望などを含めた個別性を考え

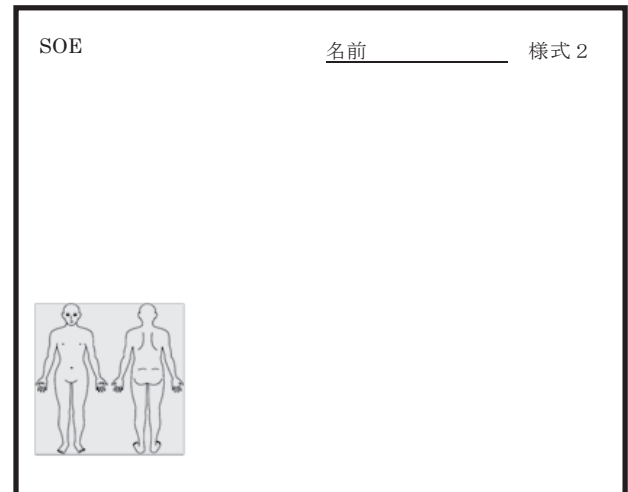


図1 様式2：人体図入り SOE シート

てケアを立案するように指導した。また、看護師が行っている麻薬による疼痛コントロールなどであっても、見学もしくは一緒に観察や実施を行えるものはすべて記載するようにした。さらに、リフレクションを用いて、実践・事実、反応、それに対する学生の感じたことや考えたこと、そして次のアクションにどう繋げていくのかを記載できるように工夫した。学生にはオリエンテーション時に十分説明をしたが、今までの看護過程の記録用紙とは異なっており、初めての記録形態であったため、実習開始後に、記録の書き方に戸惑う様子が見られた。このためリフレクティブサイクルに関する資料を作成し配布したところ、その後は学生の思考過程や感じたことなどもきちんと表現しながら、看護の実践が記録されるようになった。

4. リフレクションを用いた実習の実際

1) よりよく患者がその日を過ごすための計画立案

今回、リフレクションを用いたことで、看護問題に対する看護目標ではなく、患者の全体像を捉えた中から今日をどのように過ごしてもらいたいかという表現で日々の目標が設定された。このことにより、問題解決思考から患者の看護計画を立案するのではなく、よりよくその日を生きるための計画立案につながり、今回の実習の目標である全体像をふまえた上で最期までその人らしく生きることを支えるための看護ケアに近づいたと評価する。一例としては、複雑な家族背景がある中で、毎日見舞いに来る奥様との時間を楽しみにしていた患者に対しては、「Aさんが痛みを感じず、奥様との時間を静かに過ごすことができる」が目標となり、計画としては「介護疲労が強い高齢の奥様が患者とともにゆっくりと過ごせるように家族が来るまでにケアを行うこと」や「奥様と相談しながらサプライズの誕生祝い」が計画立案された。

<p>【 日々の計画 】</p> <p style="text-align: center;">_____ 月 _____ 日 _____ 曜日</p> <p>1. 本日の看護目標</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>患者の状態・前日の看護評価から導いたもの・患者と共有すべき目標：今日一日どう過ごしてほしいのかを明確にする。</p> </div> <p>2. 看護計画</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>本日の看護目標を達成するための具体策 本日行うケアプランを個別性に合わせて立案する。 タイムスケジュールも立案する。</p> </div>	<p style="text-align: right;">様式 1</p> <p style="text-align: center;">_____ 患者記号 _____ 学生名 _____</p> <p>3. リフレクション</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>患者や家族との関わりや実習で体験したこと・学びや感じたことを他者に状況が伝わるように書いていく。自分の言葉で書き、自分の行動や気持ちを振り返る。最後に目標達成できたかを書く。</p> </div>
---	--

図2 様式1：日々の記録用紙・リフレクションシート（書き方の説明入り）

2) リフレクションシート活用による実習指導

また、リフレクションを用いた記録用紙の活用によって、学生自身が自分の感情の動きや他者との関わり方について、気づくことができるという効果もあった。さらに指導する学部実習担当者や教員も、学生の行動の背景にある思考過程や思いを捉えることができた。一例を示すと、患者の「もうあなたは（ケアを）やらなくていい」という言葉を学生が表面的に受け止め、訪室することためらいを感じたことを知り、患者の状態を学生とともにもう一度振り返ることで患者の身体的・精神的につらい気持ちを改めて感じることができ、言葉の裏にあった患者の本当の想いを知り病棟看護師と協働して患者の対応を検討することにつながったという経験を得ることができた。今までの看護過程を用いた問題解決思考型の記録用紙では知ることのできなかつた、学生の特性やためらいやつまずき、考えを知ることができ、指導に活かすことができたと考える。また、学生が患者との関わりにおいてどんな言葉に感動をしたり、言葉に詰まったり、どんな場面から豊かな気づきを得ているのかを知ることができた。その結果、学生は患者との関わりの経験を、自分自身の感情や思いを含めて振り返ることで、看護観や死生観について考えることに繋がっていることがうかがえた。従来の看護過程を用いた記録用紙では捉えることができなかった、死を前に揺らぐ患者や家族とともに学生も揺らぎながら、どう看護していきたいと考えているのかについて、知ることができた。

また、この記録により、教員や指導者が学習者である

学生の気づきや気持ちを知ることができ、今までわからなかった患者や家族との会話やそのときの学生自身の感情や受け止め方などを知ることができた新鮮な体験であった。そして、記録をもとに教員と学部実習指導者で話し合いながら、必要に応じて、実習グループとのカンファレンスや面接を組み入れ、学生が気づいていない側面を伝え内省を深め、看護上の次なるステップに向けた指導的な関わりを行った。

3) リフレクションシートを用いた学生の感想

実習終了時には、本年度開発したリフレクションを用いた記録について、履修学生にアンケートを実施した。その内容として、書き方がわかりづらかったことや自分の感情に向き合うことが難しかったなどの率直な意見とともに、自分の行動や気持ちを振り返ることで頭の中で整理ができそれを対象の看護に繋げることができた、自分の思考パターンが分かり流れ作業になることを防ぐことができとても有効的であるなど、前向きな意見があった。これらより、リフレクションシートの活用は、学生にとっても思考の整理や自己の振り返りなどに一定の効果があったと考えられた。

Ⅲ. ターミナルケア実習にリフレクションを用いることへの今後の課題と方向性

今回、リフレクションを実習記録に取り入れたことで、学生の実習での経験を知ることができ、指導に反映できたという効果があったが、一方で課題も明確となった。

1. 事前準備と周知の必要性

今回の実習後、部署スタッフから、記録がわかりづらく、何をどう指導してよいかわからなかったという意見があがった。学部実習担当者とは、打ち合わせをしながら記録の理解を深める機会があったが、病棟スタッフ全体への周知には至っていなかったことが明らかになった。また、学生にとって初めての記録様式であったため、実習開始直後は書き方がわからずに戸惑ったという意見もあった。これらを踏まえ今後は、学生だけでなく、指導に関わるスタッフ全員にリフレクションを用いる目的とその内容や書き方、さらには指導への活かし方を周知するなどの工夫が必要であることが明らかになった。リフレクティブな学びにおけるファシリテーターの役割は極めて重要である⁵⁾といわれており、教育を行う側が十分にリフレクションの意義や活かし方を事前に理解しておくことが、学習を深めることに繋がると考える。

2. 学習者の経験学習を豊かにするリフレクティブ・ジャーナルの可能性

今回、リフレクティブ・ジャーナルにより、看護行為についてのリフレクションを行ったことで学生の思いや思考過程を含め、学生が患者や家族との関係をどのように構築しているのかを教育者として初めて知ることができた。そして、学生自身も自分の行動が他者に与える影響や思考の傾向に気づく場面も見られた。看護師は、専門職として、患者や他者との関係を通して成長を続けていく存在である。この自己の行為を振り返り、その行為の意味づけを考えていくことは、看護師としての資質を

豊かにすると考える。

リフレクションは、その視点を教育する機会を我々教育者に与えてくれる可能性がある。高度医療の進歩とともに、看護基礎教育においても患者を看護上の問題点で捉える問題解決思考が中心となっていたが、多死社会に向かい、看護教育も患者を全人的に捉えることの大切さを教える思考を養う教授方法を開発する必要がある。本年度の取り組みを踏まえ、次年度以降の実習指導に向け、より効果的な記録のあり方について検討を続けていくことも今後の課題とする。

引用文献

- 1) 目黒悟. (2009). 第2章 人を育てる, 育ちを支える方法, 屋宜譜美子・目黒悟編, 教える人としての私を育てる, 45, 東京: 医学書院.
- 2) 青木由美恵. (2003). リフレクションの実際—Gibbsのリフレクティブサイクルを活用して—, *Quality Nursing*, 9 (2), 53-61.
- 3) エンド・オブ・ライフケアの定義. (2012). 千葉大学大学院看護学研究科エンド・オブ・ライフケア看護学ホームページ, <http://www.n.chiba-u.jp/eolc/opinion/> [2015/10/25]
- 4) 田村由美, 池西悦子. (2014). 看護の教育・実践にいかすリフレクション, a17-19, b125, 東京: 南江堂.
- 5) クリス・バルマン, スー・シュッツ. (2014). 看護における反省的实践, 田村由美・池西悦子・津田紀子監訳, 280, 東京: 看護の科学社.